

移住者の移住満足度に関する研究 —準備が与える移住後の生活の満足度について—

長岡技術科学大学大学院 環境社会基盤工学専攻 非会員 熊川 毅
長岡技術科学大学大学院 環境社会基盤工学専攻 正会員 高橋 貴生
長岡技術科学大学大学院 環境社会基盤工学専攻 正会員 佐野 可寸志
長岡技術科学大学大学院 環境社会基盤工学専攻 正会員 鳩山 紀一郎

1. はじめに

(1) 研究の背景

近年、過疎高齢化が進行し集落としての機能の維持が困難になっている問題があり、その対応策として、空き家バンクや移住セミナーなどの移住推進施策が各市町村で行われている¹⁾。

しかし、すべての市町村において定住が成功しているとは言い難く、その原因として住民付き合いが上手くいかない、移住以前に思い描いていた生活と実際の生活のギャップが大きいなどの、移住後の生活の中では解決できない悩みが積み重なっていくことが考えられる。

このような問題を解決するためには、移住以前に行う準備が必要であり、この準備の満足度が高ければ移住後の生活の満足度も高くなり、定住促進につながるのではないかと考えられる。

移住前の事前交流が移住後の生活に与える影響の既存研究として、中野・小松ら²⁾は、豊田市で行われている地域面談に着目し、「移住者を受け入れる際に行われる地域面談の果たす役割と、空き家活用の成果」について検証を行っている。結果として、地域面談を行うことで選考の場だけでなく、移住希望者が地域を知り、地域住民と顔を合わせることでつながりを作るきっかけになると結論付けている。

また、加藤ら³⁾は、足助地区を対象に、地域面談や交流機会の度合いが、移住後の移住生活に与えた効果に着目し、アンケート調査を行い分析している。その結果として、地域面談や地域住民との交流機会があった世帯は、その後の生活で役立っており、移住者の移住後の暮らしの満足度につながっており、失敗しない田舎暮らしにも役立っているという結論が得られている。しかし、上記の既存研究では現在の生活の満足度や不満点、準備の度合いによる満足

度への影響は論じられていない。

(2) 研究の目的

本研究では、移住者にアンケート調査を行い、移住者が移住のために行った準備が移住後の生活の満足度にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

既存研究との違いは、事前の交流だけでなくその他の要因の影響についても調査・分析を行う点である。

(3) 研究の流れ

移住者の移住生活の満足度において、「仕事探し」「住まい探し」「移動手段」「周辺施設」「地域住民との交流」の5つの要因が、関係してくるのではないかと考えた。図-1に各要因が与える影響について図示する。

この5つの要因が移住者の生活にどのような関係があるのかを移住者にインタビュー調査を行い、関係性の確認を行った。インタビュー調査の結果から、調査表を作成しアンケート調査を行い、調査結果より回帰分析を行うことで影響を明らかにした。

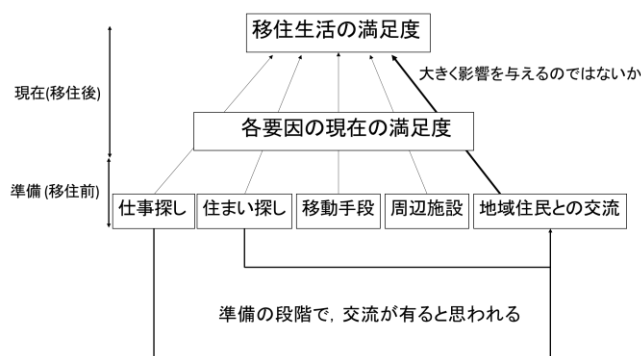


図-1 各要因の与える影響の流れ

2. インタビュー調査から見る準備の実態

(1) 移住者の定義

移住者の定義は、調査者によって様々である。本研究では、特定の施策を対象とするものではないため、広義的に「移住者とは、ライフスタイルの変化や地方暮らしへの憧れを持って、地方部や他地域へ転住し、定住している人」と定義する。

地方部では、少子高齢化による地域の過疎化、それに伴い地域人口の減少などの問題から、移住者の受け入れを積極的に行い、地域活性につなげていこうという働きがなされている。

(2) インタビュー調査

移住者の移住後の生活に、影響を与える要因を「仕事探し」「住まい探し」「移動手段」「周辺施設」「地域住民との交流」と定めた。これら5つの要因は、移住後の生活において深く関係していると考えられる。そのため、上記の要因について移住者に直接インタビューを行う事で関係性を確認し、それぞれを見ていく。調査概要を表-1に示す。

インタビューの協力を得た市町村は、魚沼市、見附市、出雲崎町で合わせて5人の協力者を得られた。

(3) 調査結果

インタビューの調査結果より、5つの要因の関係性を明らかにした。

「仕事探し」: 事前に仕事を探しており、またその中で地域住民との交流があることが言える。これは、収入を得る手段がなくては、移住後の生活が立ち行かなくなってしまう為であり生活において重要な要因である事を示している。また、仕事を探す準備の中で、地域住民との交流があり、この交流が現在の生活への満足度に影響を与える可能性も考えられる。

「住まい探し」: 移住先の住居は、移住後の生活の満足度に、一番の影響を与えると考えられる。住居の

決定の際に、「移動手段」「周辺施設」「地域住民との交流」などの要因も関わってくると考えられるからである。移住先の住居が、移住者の理想と、どれだけマッチできるかで移住後の生活の満足度に大きく影響を与えると考えられる。

「移動手段」: 移住の調査目的以外で訪れており、それによって調査せずともある程度把握しているパターンがあった。また、移住後の生活をしていく中で移動手段の把握をしていくパターンもあった。移住に成功している移住者は、事前に何度か訪れて把握をする、移住後に移動手段を把握していく事も考えられる。

「周辺施設」: 移動手段と同様に移住の調査目的以外で訪れていて、ある程度の把握が出来ているパターンがあった。移住に成功している移住者は、移動手段と同様に事前に訪れて把握をしている移住者や移住後に把握するパターンがあると考えられる。

「地域住民との交流」: 地域おこし協力隊などの特殊な移住者は地域おこし協力隊の仕事を通して先輩移住者などの繋がりから交流を広げていくことが分かった。また、仕事の準備を通して移住者との交流があり、移住後の仕事や地域の行事に参加して交流を広げるパターンも確認できた。また、移住後における地域住民との関係もあり、移住した後の地域活動や、地域集会に積極的に参加をし、その中で出来た交流関係も移住後の生活の満足度に影響を与えると考えられる。

3. アンケート調査から見る準備の実態

(1) アンケート調査

インタビューより得られた結果から、仮説を立てて調査票を作成し、移住者にアンケート調査を行った。調査概要を表-2に示す。

表-2 インタビュー調査概要

項目	内容
調査対象	役場を経由し協力を得られた移住者
調査期間	2018年1月18日～3月1日
調査形式	紙媒体によるアンケート調査
調査地区	新潟市、新発田市、胎内市、魚沼市、南魚沼市、阿賀野市、上越市、糸魚川市、出雲崎町、関川村
配布数	111票
サンプル数	44票
回収率	39.6%

表-1 インタビュー調査概要

項目	内容
調査対象	役場を経由し協力を得られた移住者
調査期間	2017年12月～2018年2月
調査形式	直接訪問してインタビュー調査
調査地区	魚沼市、見附市、出雲崎町
回答人数	5人

(2) 調査結果

移住者が準備の際に重要視した順位のグラフを図-2に示す。結果より、移住者が最も重要視する要因は「住まい探し」となっている。これは、住まいは移住者にとって、移住後の生活に最も直結しているものであり、住まいの条件が、どれだけ移住者の理想とマッチしているかという事は移住者にとって、最も重要であると考えている事が結果より分かる。

図1で示した、5つの要因の準備段階の満足度に対しての5つの要因の現在の満足度のクロス集計の結果を、図-3～図-7に示す。結果より、各要因の準備をしっかりと行った移住者は現在の各要因の現在の満足度も高くなる傾向がみられる。

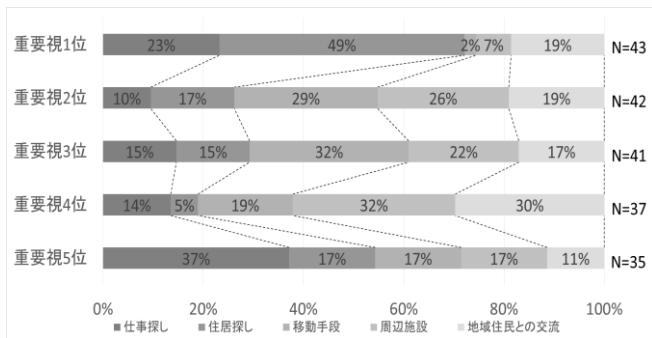


図-2 重要視した順位

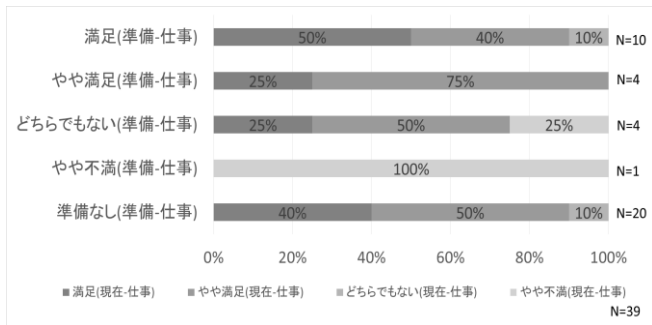


図-3 「仕事探し」の準備時の満足度と現在の満足度

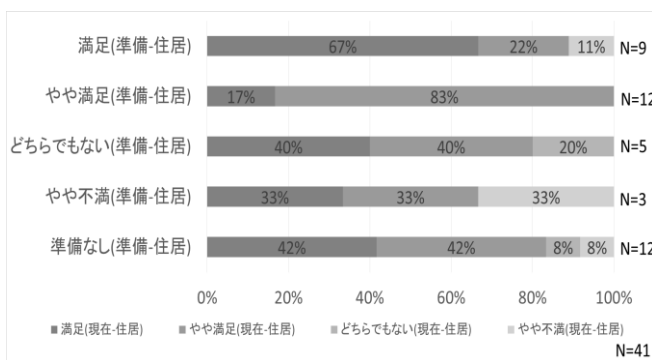


図-4 「住居探し」の準備時の満足度と現在の満足度

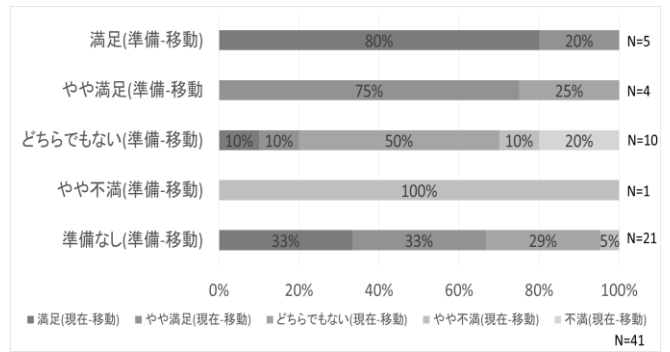


図-5 「移動手段」の準備時の満足度と現在の満足度

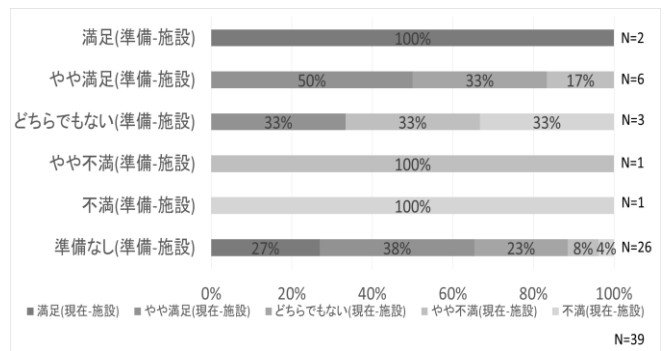


図-6 「周辺施設」の準備時の満足度と現在の満足度

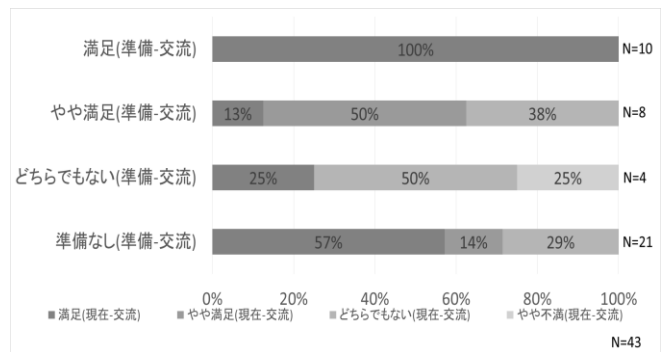


図-7 「地域住民との交流」の準備時の満足度と現在の満足度

4. 準備が与える満足度への影響

(1) 目的変数の設定

図-1の関係性より、目的変数を各要因の準備段階の満足度と現在の満足度では「各要因の現在の満足度」、移住後の生活の満足度では「現在の生活の満足度」を目的変数として設定した。

(2) 説明変数の設定

図-1の関係性より、各要因の準備段階の満足度と現在の満足度では「各要因の準備無し」、「各要因の準備の満足度」と、仕事と住まいのみ「仕事・住まいを探索中での住民との交流有り」を説明変数と

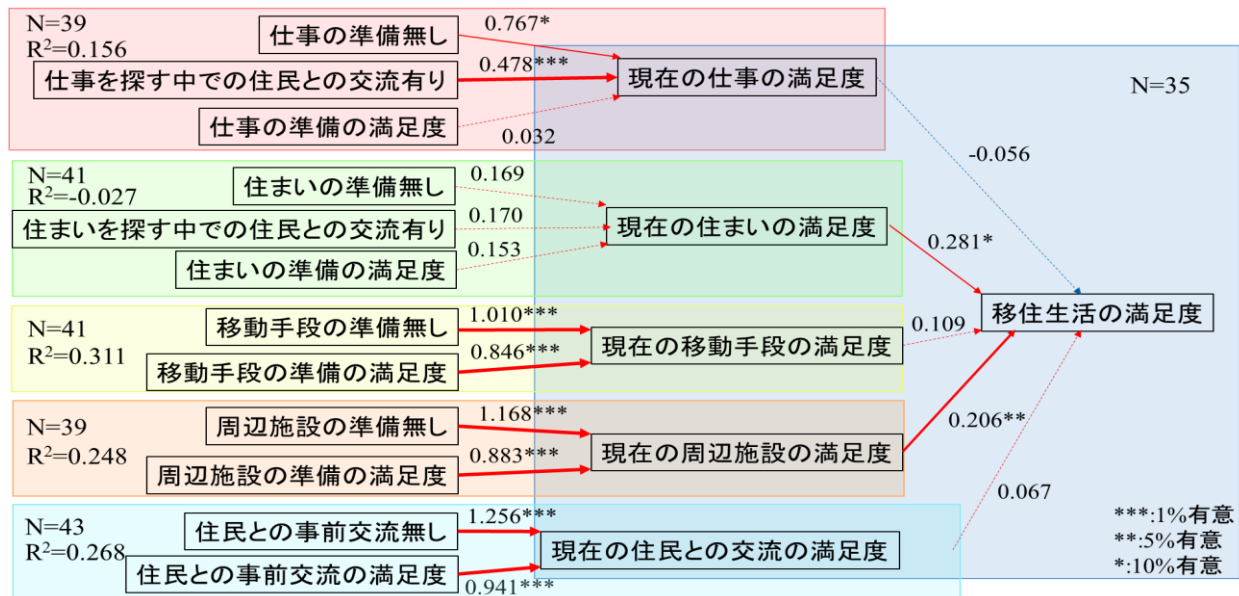


図-8 重回帰分析結果

設定した。移住後の生活の満足度では、「各要因の現在の満足度」を説明変数と設定した。

(3) 分析手法

本研究では、分析手法として重回帰分析を用いた。

(4) 分析結果

結果を図-8 に示す。現在の生活に大きく影響を与えているのは、「住まい」と「周辺の施設」であることが分かる。図-2 でも分かる通り、「住まい」は移住者の移住後の生活において、最も理想的であってほしい要因であり、「周辺の施設」もその理想にマッチするための条件の一つとして考えられる為、同様に影響を与えると言う結果になったと考えられる。今回の結果より、「現在の移動手段の満足度」と「現在の住民との交流の満足度」は有意ではなく、影響を与えていないという結果となった。これについて考えられる原因は、今回のアンケート調査に協力して頂いた移住者は移住先地域の住民との交流に無関心な移住者がいた可能性、また「現在の住まいの満足度」との相関が高かったためではないかと考えられる。

5. まとめと考察

今回得られた結果から移住者に対して行うべき施策は「住まい」に重点を置いた施策が効果を得られる可能性があると考えられる。施策案として、空き家を活用した体験移住を考えた。これは、移住受け入

れ地域にある空き家を、移住を考えている人に一定期間貸出しを行い、実際に移住受け入れ地域に住んでみるというものである。これによって、移住を考えている人は自身の理想とマッチする住居を探しやすくなり、また移住先の周辺施設の把握も出来る。そして、移住受け入れ地域の特色・生活観などの把握や、生活の中で地域住民との交流も出来るので、移住受け入れ地域と移住を考えている人の相互理解が可能となる。

今回の調査研究の課題としては、サンプル数が少なく回答結果に対して有効な分析が行えなかったこと、サンプルに移住の成功例が偏ってしまったことが挙げられる。これらの課題の解決案を以下に提示する。web アンケートや移住者の横のつながりを利用したサンプル数の増加の工夫や、サンプルの多様性をつける事や、移住者の移住の準備段階での時間軸の考慮をし、移住者が、各要因をどの段階で意識したのかなどの、意思決定プロセスを明らかにすることで、より効果的な施策の提案が可能になると思われる。

参考文献

- 1)加藤栄司：中山間地域における移住・定住施策に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp107-108, 2015
- 2)中野恵理, 小松尚：中山間地域における移住者の受け入れに関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp219-220, 2014